

10月号は、p.1-3『農業実習』、p.4-5『横浜シュタイナー学園名物、ボランティア工事 ～2024年夏の陣！～』、p.6-7『人といることの学び』教員養成講座の思い出』、p.8『ジャグリング、その奥深さ！』のトピックでお届けします。

農業実習

9年生担任 横山 義宏

今年の農業実習は、横浜からバスをチャーターして出発。西尾先生、渡辺先生も一緒だ。大洗から苫小牧までは18時間の海の上。ゆったりと目的地ソフィアファームへと向かった。9年生は高等部としては1年生ではあるが、この学園の9年生は最後の一年でもある。みんなで過ごす最後の年、修学旅行の意味合いもある。一つのバスで移動し、クラスで過ごすときは楽しい。また移動時間はかかるが、みんなでゆったり過ごす船の旅もよい時間である。

苫小牧から3時間ほどバスで移動、夕方宿舎に到着。宿舎はバスケットボールができるコートがある。運動施設に飢えている彼らは、一息つく間もなく、バスケットに興じる。農業実習に来たのではあるが、寸暇を惜しんで体を動かす彼らのなんとエネルギーであることか。最後の年だ。全力で行こう。

さて、肝心の農業実習である。今回は、宮城おひさまの丘シュタイナー学校（仙台）の9年生女子3名も一緒だ。初日は、ファームツアー。農場の見学だ。いきなりトラクターが引っ張る台車に乗って大興奮の子どもたち。いやがおうでも盛り上がる。



ポイントポイントで、牛と農場の関係、この農場のあり方などの大切な話を聞くことができた。やるべき仕事があって、十分なおもてなしができないと連絡をうけていたが、手厚いおもてなしに感謝。午後は仕事、子どもたちはがらがら手を動かして働く。なんてすばらしい子どもたちだろうと感心する。

翌日は、まず今回農場でやるべき仕事の説明を受けた。たくさん仕事があるのにびっくりしているようだ。説明の後、

グループに分かれてそれぞれの作業へ散っていく。



日々の作業は、ボリュームがかなりあるものが多い。仕事の内容ややる場所の広さを聞いて、「うっ」となることが多い。しかし、子どもたちは淡々とその仕事に取り組んでいく。「よし、ここまでやろう」と終わらせる目標をたて、作業を行う。黙々と行う人もいれば、ともだちと軽口をたたきながら行う人もいる。どの場合であっても、とにかく手が動く。そして、目標を達成し一日を終え、「やったー」と達成感を感じている。



こういうこともあった、このみさんが説明をしているとき、おしゃべりをしている人がいた。このみさんから「観光しにきたんじゃないでしょ」と注意が。高等部1年生として、これから社会に出ていく準備として、まず9年で第一次産業を学ぶために実際の職場で仕事を行いにきているのだ。ここにきている目的を再認識するよい機会であった。

今回の実習では、クラスを3つの班に分けてそれぞれの活動を日々交代で行った。一つ目の班は、朝当番班。朝4時半に宿舎を出発し、搾乳の作業と、牛糞を集めてコーンポストを作る作業。日中は30℃近くになっても、早朝は15℃前後、とてもすがすがしい。



このみさんの歌声を聞きながらの搾乳は、とても温かな空間が広がっていた。搾乳を終えた子どもたちの表情も温かい。牛糞集めはひたすら力仕事。二つ目の班は、食事当番。昼はファームで自炊だ。西尾先生、渡辺先生や仙台の先生と子どもたちが大活躍。毎日おいしいお昼ご飯を食べることができた。感謝です。三つ目の班は洗濯当番、宿舎に帰り、全員の洗濯物を集めて、(宿舎の洗濯機は使えないため)近くのコインランドリーで洗濯をする班。日中、汗を大量にかくので、毎日の洗濯は欠かせない。洗濯機が空いていないときもあり、大変な作業だ。西尾先生、渡辺先生に子どもたちの帯同をお願いした。これも感謝。

作業4日目、予報では午後は32℃まで気温が上がるとのこと。暑い時間帯は避けて作業をするということも教わる。そこで、午後は川へ繰り出した。飛び込むこともできる水深がある。はいつてみたが、水は冷たい。「冷たい」「寒い」といいながらも、川で遊ぶ子どもたち。そのうち、何人かが川



にささった大木をぬこうと奮闘し始める。何人かは、河原で石と石をならしている。なんだか不思議な光景だが、子どもは遊びの創造家である。

チャーターバスの規定でドライバーさんが交代する。朝夕の食事は子どもたちと一緒にテーブルで食べてくださった。話しかけるとときさくに答えてくださり、すっかり子どもたちは仲良くしていただいた。交代日前日は子どもたちからの記念にサインのおねだり。翌日バスの前で記念撮影。ファームまで送っていただき、みんなで盛大に見送った。旅の一コマいい思い出だ。

さて農作業に戻ろう。牛の放牧地を取り囲む柵がある。牛が脱柵しないように電気を流す電柵である。放牧地の電柵周りの草刈りを行う仕事をした。草が柵にあたって漏電を防ぐためだ。広いので一日では終わらないといわれ仕事へ向かう。放牧地のある地点から、一つのグループは右に、一つのグループは左に、黙々と作業し、一日で作業を終えた。二つのグループが出会い歓喜の声を上げた。このみさんはそれを聞いて、びっくり。

が、翌朝のミーティング。このみさん「昨日ちょっと通った時に見たけど、刈ったように見えなかったけど」。「えっ!」とわたしたち。ひょっとして間違ったところを刈っていたのか? 実は前日にやったのは放牧地の内柵だった。外柵があるのだそう。それも広いのが。がっかり～。昨日の喜びはなんだったのかとへこむわれわれ。しかし、いつまでも落ち込んではいられない。仕事はやるしかない気持ちで奮い立たせ、現場に向かう。そして、なんとなんとみんなで力を合わせ、午前中で作業を終えた。上からと下からと別れて仕事を始めて、出会ったときは、喜びというより、本当にこれであっているの? という気持ちだった。昼食時にこのみさんに確認をし、あっていると判明。みんなで喜んだ。めげずに、集中し作業を行う。一人ではめげてしまいそうでも、みんなで励まし合いやり終えられる。すばらしい体験だった。子どもたちは本当にすごい。

その電柵周りの作業はそもそも、牛の放牧地を変更するために行っていた。その説明を受けた日、「今日は午後から牛の移動を行います」とこのみさんからアナウンス。わーっと声が上がる。午後4時頃、ベンさんから指示を受ける。道が分かるところには、二人ずつ人を配置。牛が来たら両手を広げて通らせないようにとのこと。牛が集まってきた。ベンさんが牛を追い立て、このみさんが牛を呼ぶ。なかなか思ったようにゲートから出ていかない牛。このみさんがボス牛? を最初に連れ出すと、20頭近くの牛が続く。しかし、2頭ほどいうことを聞かない牛がいて一苦勞した。大変な仕事だなあと感じる。でも無事終了、その後、電柵のチェックに行ったとき、新しい放牧地で草をはんでいる姿を見た。

そして最終日には、その牛が引越しをした牧草地に調剤

を散布した。バイオダイナミックの考え方で作った肥料＝調剤を大地に散布し、牛が草をはむ大地を豊かにするものだ。その日の午後全員で液体の肥料を作り、放牧地に5メートル間隔でならび、熊笹を束ねたもので散布する。広い牧草地の斜面を横一列にならんで子どもたちが熊笹をふりながらおりてくる。途中で隣の子どもにかけてじゃれあっている姿も見られた。



一つの放牧地に対して一連の仕事ができた。電柵周りの草刈り、牛の移動、調剤散布。子どもたちにとって目的がはっきりした活動であった。

横浜から楽器を持ってきた子どもたちもいた。本人たちの希望で、夜宿舎の庭で、また作業の昼休みに、眺めの良い放牧地で、バイオリンとチェロの音が響き渡った。とても気持ちよさそうに演奏していた。なんとも良い光景である。



作業をお休みにして阿寒湖へ観光に行った一日もあった。もちろん仙台のみんなも一緒だ。アイヌコタン村に到着、お土産を探す子どもたち、さまざまな人を思い浮かべながら活動しているようだ。その後は、アイヌの古式舞踊を鑑賞。自然界のすべてのものに神が宿っていると考えているアイヌの人たちの考え方や、自然を観察して、そして尊重しているバイオダイナミックとのつながりを感じているに違いないと思う。

舞踏を見終わり、森の中を少し歩き「ボッケ」を見学。ボッケとは火山活動によりガスが地上に上がってくることだ。硫黄のにおいが漂い、地表から、ポコッ、ポコッと音を立てて気泡（ガス）が上がってくる。大地の生命を感じることができた。この日も自然と触れ合う体験ができた。



最後に作業中に、子どもたちから聞こえてきた声のいくつかを紹介したい。

「やったー、終わったー！」

「うちにおいてゴロゴロしているのもいいけど、こうやって働くのいいな」

「うん、誰かのためにすることっていいよな」

「さあ、仕事するぞ」

「今日俺あんまり仕事してない」

「よし気合拭きするぞ」（食堂の床を見て雑巾できれいにしようとして）

「地球愛！！ 大地愛！！ I love earth!!」（調剤を散布しながらの雄たけび）

「先生、手伝いましょうか」

「先生、休んでください、若者がやります」

「ありがとう、北海道一！！」（苫小牧での出港時、陸に向かって手を振りながら）

「おれらには農業実習っていう財産がある」（帰りのバスの中で）

子どもたちと一緒にいて感じたのは、彼らみんな、よく工夫し、集中し、よく働いた。

そしてなによりも、仕事をするのを楽しんでいたことが感じられた。そして、西尾先生と渡辺先生の絶大な補助を得て、この実習を無事終わることができた。感謝です。

たくさんの笑顔と笑いに包まれた14日間だった。子どもたちよ、ありがとう。



横浜シュタイナー学園名物、ボランティア工事 ～ 2024 年夏の陣！～

5 年生担任・ボランティア工事担当教員 長井 麻美



今年創立 20 年目になる横浜シュタイナー学園は、創立当初から「協働して学校をつくる」ことをモットーに校舎づくりに取り組んできました。その名も「ボランティア工事（略称 V 工事）」。設計者、教師、保護者、友人たち、そして時には子どもたちまでが、共に体を動かし、手を動かしながら一つ一つの工程を大切にしました。創設期にはかなり大がかりで時間のかかる工事がありました。20 年経った今、そうしてつくられた子どもたちの学び舎は少しずつ老朽化しています。そこで、保護者に呼びかけ、週末などを利用して少しずつ古くなった部分や補修の必要な所に手を加える「ボランティア工事」が行われています。

この 7 月から 8 月にかけて、延べ 5 日間行われたボランティア工事。参加されたお父さんたちの感想の一部をご紹介します。

今年も V 工事の夏がやって参りました。今年の夏は十日市場校舎の水洗い場のタイル補修と、霧ヶ丘校舎の壁紙の張り替え工事の 2 本立て、延べ 5 日間の長丁場となりました。加えて霧ヶ丘の玄関の柱を板貼りにするスペシャル工事も池内さんを中心に行われました。壁紙貼りも毎年継続しているので、毎年手際が良くなって来ているように思います。綺麗に仕上がった姿を見ると、作業チームの絆も深まった気持ちがします。まだ、V 工事を体験していない方は、是非次回にご参加下さい。お手伝い頂いた先生方、参加頂いた保護者の皆様ありがとうございました。（8 年 坂田 辰男）



私は 5 日間の工事日程のうち 3 日間参加しました。そして十日市場校舎の流し台の修復工事ではタイル剥がし、タイル作りを、また霧ヶ丘校舎の階段の壁紙の貼り替え工事では壁剥がし、壁塗り作業をしました。V 工事は、楽しかったです。各工程では V 工事の先輩方よりその工程のゴールやコツを教えて頂き、手と体を使って作業に没頭し、ときに創意工夫のために頭を使いました。楽しかったという感覚は疑いようもなく、その理由を一つだけ挙げるとしたら、童心に帰って夢中になれたからだと思います。タイル作りでは、割れて角張ったタイルをヤスリで削って、丸みのある、温かみのある形に仕上げていきました。削っては粉を払って形を確認してまた削るという作業を繰り返しました。少しずついい感じの曲線を作っていきます。この作業の楽しいという感覚は、イソップ童話の「3 人のレンガ職人」の、「大きな目的を感じているから」というものではなく、もっと原始的なものだったと思っています。童心に帰ったという言葉がしっくりきました。そんな楽しい思い出ができたのは、V 工事メンバーの素敵なチームワークがあってこそだと思います。この場を借りて、一緒に活動した皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました！（1 年 深川 道陽）



今年も十日市場校舎の水場を、村山先生を偲びながらの補修と、霧ヶ丘校舎の階段壁紙（オガファーザー）の革命的な手法でのがし・貼りに参加できました。いつも見慣れた校舎ですが、いざ補修に入り詳しく眺めて見ると、先人たちの知恵、汗と涙（が出たであろう）の苦労の後が見受けられました。古きを受け継ぎ少しずつ新しく進化していく学園の歴史の一コマに参加できて、良かったです。あとは、子どもたちに「おっ！」と思ってもらえれば満足です。（4,7 年 本橋 篤）



今年の夏のV工事は壁紙張りにプラスして緊急に対応が必要だった十日市場校舎のタイル補修があったので、5日間という長丁場になりました。お盆休みの始まりにも日程が重なっていたので、人数が集まるか心配でしたが、1,2年生保護者の参加も多く学年を越えて交流をしながら作業をすることができました。また今回は昨年度の卒業生も応援に駆けつけてくれ、神田先生との師弟共同作業が実現しました。ワイワイと楽しそうに作業をする姿を見て羨ましく思いました。個人的には霧が丘校舎の柱に板を張る作業を数名のお父さんたちと協力しながらやりました。普段は設計側の人間なので無理難題を投げることが多く、今回はそれほど難しい作業ではないから2日間ぐらいで終わるであろうと舐めていましたが、壁紙張りが進行する横で最後の最後まで板張りが終わらないという状況で焦りながら、(業者の方々いつも無理を言ってすみません)と心で何度もつぶやきながら作業を続けました。互いを理解するには経験は大切だと改めて感じました。(4年 池内 野有)

急遽参加させてもらうことになりました。初回は父に半ば強引に連れてこられたというか・・・あまり乗り気ではなかったのですが、作業に参加してみるととても楽しく参加することになってよかったなと思っています。横浜シュタイナー学園では9年もの間過ごしてきましたが、今まで裏側の作業というものに目を向けてきていませんでした。今回参加させてもらったことで、いろいろと今まで知らなかったことを知れてとても新鮮な体験でした。また、いつも学校の補修をしてくださっていたこと本当に感謝しています。ありがとうございました。また機会があれば参加させていただくかもしれません。(OB 11期生 千代 絵)



今年は初日のみでしたが、十日市場校舎の手洗い場のタイル修繕というミッションに参加しました。工事が始まると、自然と「タイル削りチーム」と「タイル貼りチーム」に分かれており、気が付いたら、私は長井先生の助手と化していました。長井先生の傍に立ち、長井先生の好みのタイルをタイル削りチームに伝え、出来上がったタイルを丁寧に長井先生に渡すという、なかなかの大役です。長井先生のご機嫌を損ねないようにとずっと緊張しっぱなしでしたが、なんとか任務をまっとうできたと思います。パズルのように次々と色とりどりのタイルをはめ込んでいく長井先生の技に、私は驚嘆。しかし、タイル削りチームとの行ったり来たりがだんだん面倒になり、最終的には、自分で削った方が早いかもと思いタイル削りを内製化。長井先生の細やかなオーダーに応えるべく、時短化を図りました。他学年の保護者の方々や教員の皆さんと楽しい時間を過ごせました。また来年もぜひ一緒にできることを楽しみにしています!(2年 大楠 誠)



今を遡ること10年ほど前のことです。持続可能なシュタイナー教育を目指して模索してきた横浜の教員会は、長い議論の末「教員養成を教員の手で行う」ことを決意しました。この発端は、シュタイナー教育教員養成講座運営会のメンバーである澤口安城さんから「この素敵な十日市場校舎を会場として、教員養成講座を共催してみないか。」とお誘いをいただいたことでした。十日市場校舎はマンションのワンフロアでありながら、一步踏み入れたらそこは別世界。どこか公共の研修室を借りて行う講座とは一味も二味も違う体験になるだろうというのです。そこで、教員会で何度も話し合いが重ねられました。「我々の力で後進を育てるなどという大それたことが可能なのか」「人材不足に悩むなら、出会いの場を作る必要がある。教員養成講座はその出会いの場を作るのではないか」誰もこれまで経験したことのない、「日々の授業と講座運営の両立」が重荷に感じられ、二の足を踏む意見もありました。最後の一人が納得のいくまで話し合いは続き、とうとう開講の運びとなったのです。初めは「授業実践については学園の教員が、シュタイナーの人間観や特別な研究課題については経験豊かなシュタイナー教員養成講座運営会のお力を借りて行う」という共催の形でプレ講座、第1期講座と続き、2期、3期と期を重ねるごとに教員が座学も含めてほぼすべてを担当する今の形になりました。現在は第5期の2年目に入っています。これまで講座を修了した方は1期から4期まで合わせて112名とすでに100名の大台を超えています。

その後、「横浜シュタイナー学園で学ぶ」シリーズの講座が増えました。手仕事教員養成講座とシュタイナー学校の英語（1年生から9年生まで）です。それぞれ専科教員の熱意によって、開講され、現在手仕事講座は3期目が進行中（これまでの修了者31名）、英語の講座は3期目が始まったと

ころです（これまでの修了者25名）。修了生の何人かはすでに横浜で同僚として働き、他のシュタイナー学校でも活躍しています。また、遠く離れた地に在住の修了生からは毎年お便りをいただくなど、その後の交流も続いています。講座を通じて、シュタイナー教育、横浜シュタイナー学園に対する理解や共感が広がり、この教育を支える裾野が確かに広がっているのを感じます。最初に声掛けしてくださった澤口さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

これからやってくる子どもたちのために、今、目の前の授業も大切なのはもちろんですが、新しい人材の育成や芽生えてきた各地の小さな全日制シュタイナー学校をサポートする仕事もないがしろにできません。横浜では教員養成を通じて特に沖縄シュタイナー学園と連携を図り、新しい先生方の研修のサポートを行っています。

日々の授業とは違うところで教員会やスタッフが活動していることをこの機会に知って、見守り、応援していただければ幸いです。（すでに、おひさまカフェには初期から焼き菓子販売の提供協力を受けており、受講生に好評を博しています！）



「人といることの学び」教員養成講座の思い出

1年生保護者 菊池 裕実子

「どうかみなさん、ぴかぴかの1年生になったつもりでこれからの話を聞いてくださいね」

コロナ禍もだいぶ下火になりつつあった2022年の年明け。震えるような寒さに体調を気遣いながら、第4期教員養成講座がスタートした。十日市場校舎に集まった初めての面々と共に、黒板の前に立つ長井先生を囲むように座った。

「これからみなさんは学校に通うことになります。どうして学校に通うんだと思う？ そう、学ぶためだね。ではどうして私たちは学んだらう……？」

1919年以来、世界中のシュタイナー学校の入学式で行われている初めての授業。それがこうした根源的な問いかけから始まることは、事前に本を読んで知っていた。それでも実際に人と肩を並べ、一人ひとりの目を見つめながら語りかけてくれる先生の言葉を聞いていると、思わず涙があふれてくる。自分がとても大切に扱われている、という感じがしたからだと思う。「私はずっとこんなふうに語りかけてもらいたかったんだ」という強い感情に揺さぶられた時間だった。

教員養成講座に通っている、と言うと周りの人たちが困惑



するくらい、教育というものから縁遠かった。不登校という言葉がなかった時代、通わない選択肢はなく（先生がタクシーで迎え来たこともあった！）小・中と公教育の中で何度もつまづいてきた私は、早く「大人」になりたくて仕方がなかった。そうすれば学校という場所に関わりを持たずに生きられると思ったからだ。ところが数十年後、娘が生まれたことで再び教育と向き合うことになる。自分の過去の傷を癒さなくては彼女を学校に送り出せる気がしない……と悩んでいた頃に出会ったのが、横浜での教員養成講座だった。

隣の人と手を取って踊り、歌を歌ったエポック授業。初めての手仕事で手のひらに羊毛を載せてもらった時の喜びと、子どもに「寂しい・恥ずかしい」思いをさせないように配慮された運動遊び。共に空間を創造するオイリュトミーの尊さ、仲間と顔を突き合わせて議論した『一般人間学』の講読、そしてどの授業より最も静かで、他者の存在に耳を澄ませた音楽の時間……。並行して受けていた英語講座では、（耳にする言語がまだ理解できなかったとしても）「わからなさ」の中に留まり、受け入れることの大切さを学んだ。シュタイナーは、「子どもを教育することは治療すること（healing）でもある」と語っているけれど、頭・心・体に働きかける授業は、大人の私にとってもすべて治癒のように作用したのだった。

そんな中、最も印象に残り、またこの学園らしいと感じたのは、実は次のようなささやかな時間だ。講座では毎回朝にオリエンテーションが行われ、それぞれの近況報告や「ここに来るまでに見つけた美しいもの」について1分間のシェアリングをする。互いの話に耳を傾けながら、私たちは物質的な体だけではなく、それぞれ心を、感情を持ち、全人生を背負ってここにいるのだ、ということ強く実感させられる体験だった。

「私たちはどこから来て、どこへ行くのか、私たちは何者なのか——」江戸時代に良寛が漢詩にしたため、ゴーギャンが絵のタイトルにした問いがある。この究極とも言える問いに導かれるように、すべての授業の中で一貫して、人の「目には見えない」部分へのリスペクトが感じられた。それが冒

頭に書いた「自分が大切に扱われている」という感覚に繋がっているのだと思う。

たとえば黒板にチョークでまっすぐに線を引く姿や、ろうそくに火を灯す際の真剣な眼差し。先生方のひとつひとつの振る舞いが「私もそうありたい！」という思いを引きだしてくれるもので、こうした憧れの気持ちに貫かれ、駆け抜けた2年間だった。人と人とが出会い、共にいることで学べることの豊かさに今でも感動を覚えている。与えてもらってばかりだったけれど、そのことに深く思い至ることができた時、人は与える側にも回ることができるんだろう。私はようやく、自分が「大人」になれそうな気がしている。

本当はそれぞれの授業について、また先生方の愛とユーモア（！）溢れるエピソードについて、いくらでも語りたことがあるけれど紙幅が足りない。その代わりに、いつか学園で顔を合わせる事ができた時に、ぜひ一緒に語り合えたらと…まだまだ苦手なことも多いけれど、「人といることの学び」は今も続いていて、子どもと共にこの場所でさらに深めていきたいらと願っています。





シュタイナー学校では5年生頃から思春期にあたる学年にサーカスで行われている色々な技芸を学ぶ時間があります。中にはその時の体験からサーカスに就職する人もいますということです。

横浜シュタイナー学園では毎年2学期に6年生と7年生がプロのジャグラーの方からお手玉を使うジャグリングを習います。お手玉は6年生の手仕事の時間に各自が縫って作ったものを使っています。回数は各クラスの時間割の都合とジャグラーの先生のお仕事の都合を照らして、だいたい各クラス10コマをお願いしています。今年も9月後半からジャグリングの授業が始まりました。

では何故思春期の生徒たちにジャグリングの授業を行うのでしょうか？そのことを改めて考えてみたいと思います。

6年生頃から子どもたちの肉体はどのように変化するのでしょうか？個人差はありますが中には小学生料金でバスに乗るといぶかしげに見られる子が現れ始めるのもこの年頃です。急に身長が伸びたのです。つまり骨が伸びたのです。しかし骨をしっかり支え、自由自在に身体を動かせるだけの筋肉はまだついていません。ここで筋肉を付けてしまうと筋肉に引っ張られて骨が伸びにくくなるので、筋トレなどはまだあまりしない方が良いでしょう。

筋肉に充分支えられない骨が身体の中で伸びている子たちは、重力を今までになく感じていることでしょう。重く、気だるそうに見えるかもしれません。しかし彼らの内面では知的な部分が目覚め、今までよりも深く客観的に物事を考えられるようになっていきます。骨の成長は思考の発達を促すとシュタイナーが言っている通り、6年生頃から子どもたちの思考力は大きく伸びます。教師や親の矛盾した言動や理想に反した態度などは厳しく批判されます。また、ある出来事が起きた原因が知りたくなります。ですから身の回りに起きている当たり前だと思っていたことの科学的原因を学ぶ物理が始まります。それまでは神話と事実が入り混じったような内

容だった歴史が、事実に基づいた因果関係のある生身の人間の物語として紹介されます。

また、彼らはいつもすぐ眠そうです。夜更かしをしていなくても学校で大あくびをしている姿をよく見かけます。脳科学では脳は起きている間は休みなく働いているので眠っている間に休養を取ったり、メンテナンスを行ったりしているそうです。乳幼児の脳はその時期に活発に形成されているため赤ちゃんはたくさん眠ります。思春期の子どもの脳は「子ども脳」から「大人脳」に変容する改築に多くの時間が必要のため、彼らもたくさん眠るの必要がありいつも眠そうなのです。

重そうで気だるそうで眠そうで、図体が大きくなり、大人に自分勝手な理由で辛辣な批判をしてくる「昔は可愛かったあの子」がこんなふうになってしまった事実は、実は親御さんの子育てが順調に健全に進行している証拠なのです。ですから可愛くなくなった我が子に大きな「順調」のハンコを押してあげてください。

しかし順調に育っているとはいえ、彼らも自分の身体のどこちなさや眠さやイライラをどうして良いかわからないのです。そこでシュタイナー教育では彼らが少しでも楽しく芸術的に運動機能や身体のコーディネーション能力を発達させ、想像力や創造性を磨き、リズム感をもって自然に良い姿勢になれるようなサーカスの技を学ぶ体験を授業に取り入れているのです。

自分の内面をあまり表に出さなくなった彼らですが、ジャグリングをやるのは楽しいので難しい技ができるようになるためによく練習しますし、発表するからには拍手が欲しいのでお客さんにユーモラスな表情や動きを見せる工夫もします。つまりジャグリングを学ぶことによって、彼らは身体的にも精神的にも一段高く成長できるのです。

7年生の2学期の学期祭は2年間学んだジャグリングの発表です。まだまだ恥ずかしさが勝りユーモラスに舞台上がる姿を想像するのが難しい彼らですが、まだ時間はあります。失敗しても笑って決めポーズが取れることを担任としては一番の目標にしたいです。皆さんには今からお願いしておきます。どうぞ惜しめない拍手をしてあげてください。

横浜シュタイナー学園 ～Newsletter 第166号～
2024年10月31日発行

編集：広報の会
発行：NPO法人横浜シュタイナー学園
<https://yokohama-steiner.jp>
〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20
TEL 045-922-3107
※掲載内容の無断転載をお断りします